

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業 (<https://ag-5.jp>)

特集 1

在外教育施設から 未来をひらく



シンガポール日本人学校チャンギ校 「調べたことを伝えよう」

二〇一七年度に海外子女教育振興財団が文部科学省の委託を受けて始めた「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業（略称：AG5）」が、五年の事業期間を終える。これに伴い、本年一月六日に東京・愛宕の海外子女教育振興財団において、座長の佐藤郡衛先生をはじめ運営指導委員の先生がた、同財団の中村雅治相談役らが集まり、まとめの会を開いた。

本誌の巻頭で連載してきた「AG5だより」も最終回を迎えることとなり、このまとめの会で報告された内容を特集枠でお送りする。

当初は五つだったプロジェクトが八つに増え、また二〇年から新型コロナウイルスの影響により、それまでは（ときには海を渡って）対面で行われていた活動をオンラインに切りかえる必要が生じた。だがそれは同時に、リモートでの教育や支援の可能性をひらきもした。なかには日本国内の学校に先駆けるような成果も生まれてきた。未来世代が世界で活躍していけるように、こうした事業を国内外で継続していく方策が問われている。

なお、詳しい研究経過や成果等についてはAG5のサイト (<https://ag-5.jp>) をご覧いただきたい。



まとめの会の様子

佐藤 まずどういう経緯でこのAG5が始まったのか、中村相談役からお話ししていただくことから始めたいと思います。

中村(雅) 海外子女教育振興財団では二〇一一年に創立四十周年記念事業の一環として、「帰国児童生徒に関する総合的な調査研究報告」を佐藤郡衛先生に座長を依頼してまとめていただきました。そのなかで新たな教育に向けた三つの視点として、適応のための教育、国際教育、グローバルな学力の育成というものを提示していただきました。特にグローバルな学力の育成という視点では、批判的思考力、問題解決力、コミュニケーション

「グローバル人材」の育成は時代の要請



さとう ぐんえい
佐藤 郡衛
東京学芸大学副学長、目白大学学長を歴任し、現在は明治大学特任教授。AG5運営指導委員会委員長



なかむら まさはる
中村 雅治
海外子女教育振興財団の専務理事／理事長を経て、現在は同財団の相談役

ション力、協働能力、想像力を高める教育をすべきではないかと。そのための取り組みが一三年の、蘇州の日本人学校でのグローバル時代にふさわしい新たな創造をしたいという要望にこたえるための支援です。アクションリサーチ型の取り組みを行うため、まず全校の実態調査から始めました。また、一四年には香港日本人学校から学校改革への助言を求められ、日本版のIB（PYP^{*}）的な取り組みをご提案いたしました。具体的には四年生からグローバルクラスという特別なクラスを新設し、教育内容も学習指導要領に準拠しながら探究学習を日本語と英語の両言語で学ぶグローバルスタディーズという科目を新設。加えて、英語力の向上をはかるため、理科と数学を英語で学ぶイマージョン教育を導入しました。



香港日本人学校グローバルクラス6年生「地質学習」

この間、国内では急激にグローバル化が進展する社会における教育改革が論議され、国の日本再興戦略でも在外教育施設における質の高い教育の実現および海外から帰国した子どもの受け入れ環境の整備ということが明確に謳^うられるようになってきました。そこで一六年四月に発足させたのがG-ONEプロジェクト（Global Overseas New Education Project）というもので、在外教育施設におけるグローバル人材育成等の研究を、蘇州や香港で取り組んできたことや補習校に対する支援も含めて一括して行っていくと考えたわけです。

材育成強化戦略」を検討するタスクフォースが設置され、一六年五月に「在外教育施設グローバル人材育成強化戦略」がまとめられました。具体的提案としては、「日本人学校等のグローバル拠点としての活用・発信強化」「高度グローバル人材育成拠点としての日本人学校の教育水準の強化」「派遣教員の確保・充実、質の確保」「教育面における学校運営との連携強化」というようなことが示されました。そして、文科省からの委託を受けて「在外教育施設の高高度グローバル人材育成拠点事業」AG5を一七年四月にスタートさせました。

- 佐藤** AG5は、Advanced Global Five Projectsの略です。最初は次の五つのプロジェクトから始めました。
- ① 日本人学校における高度グローバル人材の基礎的資質形成のためのプログラム開発
 - ② 日本人学校における日本語教育プログラム開発
 - ③ 日本人学校における教員（学校採用教員）の指導力向上のためのプログラム開発
 - ④ 補習授業校における日本語能力向上のためのプログラム開発
 - ⑤ 日本文化発信の拠点形成プログラム開発

*1 PYP 国際的カリキュラムであるIB (International Baccalaureate) の一部で、3歳～12歳を対象とするPrimary Years Programmeのこと。
*2 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/002/_icsFiles/afiedfile/2016/09/08/1376422_2.pdf

この⑤は日本語と日本文化の発信プログラムの開発と学校の図書館を活用した文化交流のプログラムの二つを行いました。一九年になるとICTを活用した遠隔での教育の質向上のためのプログラム開発と特別支援教育に関する遠隔指導の実施に向けた実践的研究が加わって、八つのプロジェクトになりました。

もともとはグローバル人材ということだったんですけれども、それと同時に在外教育施設の課題解決も含めて、新しい在外教育施設の方向性になり新しい教育の姿を見出したいということ、ある程度の成果は出せたのではないかと考えています。

それでは、それぞれのプロジェクトについて、ご担当いただいた先生から発表していただきたいと思えます。

日本人学校はグローバルで 探究的な学びに最適

日本人学校における高度グローバル人材の基礎的資質形成 のためのプログラム開発

植野美穂

二〇一六年から香港日本人学校香



うえのみほ
植野美穂

海外子女教育振興財団教育
相談室長



パリ日本人学校研究紀要「世界で活躍するグローバル人材の育成～「対話的な深い学び」による授業改善を通して～」



「日本人学校における「探究学習のすすめ」～実践ガイドブック～ 第1部 理論編」
<https://ag-5.jp/report/theme1/study/detail/138>

港校からの要請で特色あるカリキュラムの開発に取り組んでいました。

その翌年にAG5が立ち上がったときに考えたのが、この香港での成果からグローバル型能力を身につけるような特色ある教育（グローバルスタディーズ）を他の学校にも展開していくことでした。つまり日本人学校には日本の国内の学校よりもすぐく多様な子どもたちが集まっていますし、異文化にあることで、さまざまな問題・課題をグローバルに考えることができます。日本人学校こそ教科の枠を超えてグローバルな視野で探究的な学びを実現する場であるはずなので、シンガポール、パリへと広げていったわけです。

探究学習については、子どもたちが調べて発表して終わりと捉えられていることがあります。たんなる調べ学習とは違い、子どもが自ら課題を発見・追究し、議論し、答のない新たな課題を生み出して取り組んでいくというサイクルです。そのような本来の意味での探究学習はどう

あるべきか、各日本人学校で研究開発をしていただきました。

シンガポール日本人学校の場合もともと現地理解教育を中心に持続可能な社会のための教育を中心とした総合学習に取り組んでいました。AG5に加わってからは、IBの考え方をとり入れて、子どもにとって身近なシンガポールが抱える問題を切り口に、子どもたちの価値観や行動の変容が見られるような深い学習活動へと発展できたと思います。

またパリ日本人学校では、二十一世紀型スキルの育成を目指した汎用性がある小中一貫探究学習のカリキュラム開発に取り組んでいます。一九年度にはテーマに沿ったフィールドワークに出かけることができました。

たが、二〇年度はコロナの影響もあり日本国内の五つの研究機関によるオンライン講座をもとに子どもたちが「学びの地図」を作成し、最終的には「パリ日提言フォーラム」を開いてそこで発表するに至りました。

これらの実践を他の日本人学校に

紹介するため、日本人学校ならではの探究学習のよさや難しさ、探究学習では教科活動をどう行えばいいのか、探究学習のカリキュラムを開発していく具体的手順などを含めた『探究学習のすすめ』という実践ガイドブックをまとめました。すでに理論編ができあがっていますが、今年度は香港、シンガポール、パリの実践を具体的に紹介する実践編をまもなく発行する予定です。

課題としては、さまざまな交流を試みたなかで、学校を越えて同じようなテーマについて深く子ども同士が学び合う場を設けるのは難しいように感じました。

さらに学校独自で特色あるカリキュラムや科目をつくった場合、日本人学校の先生は入れかわりが激しいので、それをつなげていくのがすごく大きな課題になります。そのためたとえば香港では新しく赴任した先生にもわかるように、「グローバルスタディーズはどのようなものか」「何を大切にしているのか」「どう展



みせちかこ
見世千賀子
東京学芸大学国際教育センター准教授

二〇一七年から一九年まで台湾の台北、台中、高雄の三つの日本人学校で行った事業です。
まず台北では、三割を超える子どもたちが国際結婚家庭の子どもで、かなり前から日本語指導が必要な一、二年生を対象に週一回、放課後に三

見世千賀子

日本人学校における日本語教育プログラム開発(1)

日本人学校で効果的に日本語を学ぶ

開しているのか」「子どもたちが主体的に学べるための学年ごとの評価の方法とは何か」についてきちんとまとめたものを学校内で作成しましたが、それを他の学校などにも使っていただけのようにつくり変えていく必要もあると思います。

十五分、日本語の補習の時間を設けていました。今回のプロジェクトではそうした取り組みをベースとして、日本語指導が必要な子どもが在籍学級での教科学習によりいっそう参加できるようにすることを意識したプログラムをつくりました。具体的には、国語と算数と総合的な学習のなかで、語彙とか文章の理解とか子どもがつまずきやすい箇所を取り上げて、一回あたり二十分程度でできるような活動案を学年ごとに二十回分ずつつくりました。通常の授業に先立って学習しておくことで子どもたちがより積極的に授業に参加で



台北日本人学校 iPadを活用した授業の様子



『日本語補習クラスのための学習活動案集 ~台北日本人学校の実践から~』
<https://ag-5.jp/report/theme2-1/study/detail/92>



台中日本人学校 ICT機器やデジタル教科書を算数や国語などで有効に活用



『在籍学級での日本語支援の視点を取り入れた授業づくりの手引き ~台中日本人学校の実践から~』
<https://ag-5.jp/report/theme2-1/study/detail/97>

きるようになり、先生がたにもそうした先行的な学習の効果への気づきが生まれるなどの成果がありました。台中でも、半数近くが国際結婚家庭の子どもたちで、日本語指導が必要な子どもが多く在籍しています。そのため、中国語の授業の裏の時間で日本語の指導を一年生から六年生まで、週一回行っています。今回のプロジェクトでは、在籍学級での日本語支援の視点を取り入れ、より子どもたちの学力を上げていく試みを行い、『在籍学級での日本語支援の視点を取り入れた授業づくりの手引き』を開発しました。ひとりの子ども



高雄日本人学校 日本のアニメキャラクターなどを用意しておき、児童の興味に合わせて使用できるようにする。

もを想定していただいて、日本語に關してどのような手立てがあればより授業に参加できるようになるかを意識したうえで、授業をどのようにつくっていかばいいのか、手順も含めてわかりやすく示しています。
高雄日本人学校では、現地校の中に間借りした校舎があるという環境を生かして、派遣教員の先生が現地校の五、六年生を対象に日本語や日本文化を教える活動をしています。その際に活用する教材を開発しました。子どもたちが興味を持ちやすい日本のアニメや食べ物などの画像をとり入れた学習、あるいはゲームやタブレット端末などを活用しながら、楽しく学べるような活動案集をまとめました。こうした取り組みを通して、日本人学校の先生がたは異文化や他者を理解することの重要性や必

要性を肌で実感されています。また、現地の子どもに教えることを通して、自分たちのクラスにいる台湾ルーツの子どもへの理解も進んだそうです。日本人学校における授業においても、日本語の面や文化の違いなどに目が行くようになったという成果がありました。

全体を通して、日本語指導体制を充実させることがまだまだ必要だと思っています。台北では三年生以上の学年では補習が行われていません。少数人種だとか個別の指導を必要としている子どもたちもいます。また同時に、台中で行ったような在籍学級での日本語支援の視点をとり入れた授業づくりも、すべての学校で必要だと考えています。

加えて、母語あるいは母文化を大事にしながらか多文化共生を柱にした授業づくりを行っていくことが今後の課題として挙げられると思います。そしてもう一つ日本人学校への派遣教師がよりグローバルな感覚を持つ教師として育っていくために、高雄で行われているような取り組みは非常に有効ではないかと思えます。教師としては言語も違い、負担の大きいところではありますが、その反面、得られるものも大きいと考えています。

日本語指導から 多文化共生へ

日本人学校における日本語 教育プログラム開発(2)

近田由紀子

台湾での実践を基盤にしつつ、それを発展させるような形で、一九九年度から二一年度までマニラ日本人学校を拠点に大連日本人学校、青島日本人学校が提携・協力して日本人学校におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発と、そのための教員研修のプログラム開発、複言語主義をとり入れた総合学習型日本語指導に取り組みました。複言語主義というのは、学習者に焦点を当てて、子どもたちがもともと身につけている第一言語を活用しながら複数の言語を育てていくというものです。多文化共生の学校づくりを含めた日本語指導として取り組みました。

まずマニラ日本人学校、大連日本人学校、青島日本人学校の取り組みですが、この三校は学校の規模も体制も違います。たとえばマニラ



こんだ ゆきこ
近田 由紀子
目白大学専任講師

日本人学校では、週一回放課後に日本語学級を開設して学級担任が指導するとともに、在籍学級の授業でも日本語支援をしています。青島日本人学校は日本語指導担当教師が学校組織のなかに位置づけられていて、課外で日本語支援をしていたり、個別に取り出して指導したり、学級に入り込んで指導したりしています。そして学校全体でも取り組んでいます。大連日本人学校は課外での日本語指導はなく、日本語学級もありませんが、在籍学級で日本語支援を行っています。

でもプロジェクトを始めてみると、共通点が多々ありました。一つは体制づくりで、校内研修と関連させることでおのずと多文化共生の学校づくりに向かっていったことです。二つ目は実態把握と評価です。それぞれ個別の指導計画を作成していますし、指導の記録も取っていて、そこからふり返しをし、次の指導に生かすという、PDCAのサイクルがき



青島日本人学校 オンライン交流会の様子
(2020年度青島冊子より)



大連日本人学校 インタビューでわかったことを発表・共有。動画・画像など視覚的アプローチで支援を行う。(2020年度大連取り組み報告資料より)



マニラ日本人学校 日本語指導を取り入れた授業実践。小5の総合的な学習で川の環境を改善するにはどうすればいいか考える。

ちんとできています。三つ目は日本語支援にバイカルチュラルの視点を加えた授業実践です。教科横断型の視点からプランを立てるとか、総合的な学習として単元を組んでいくとかの例があります。具体的には、体験的な活動や表現活動を重視した学校づくりをする、モデル文を使ったりキーワードを示したりするなどがあります。また日本語支援にICTも活用しました。これらの取り組みのなかで、特にバイカルチュラルな視点を生かした授業実践、たとえば現地素材を使ったり、在留国と日本の文化を比較したりする実践は効果的でした。青島日本人学校では自分のルーツとかかわりのある絵本を紹介しようという実践がありました。在留国だけにルーツを持っていく子ばかりでなく、ほかの国にルーツを持っている子どもたちもいます。そこで多様性がさらに広がっていきました。そして子どもたちの自己肯定感が高まったり、自信につながって

いったりという成果が見られました。四つ目は連携・協力です。教職員のチームワークはもちろんのこと、保護者との連携・協力というのが欠かせなくて、三校とも丁寧に保護者とかかわって協力を得ていました。これらの成果を、他の日本人学校や国内の外国人児童生徒等の教育を行っている学校の参考になるのではないかと考え、オンラインでの情報交換会・合同研究会という形で発信しました。このプロジェクトの二つ目の柱である教員研修にもつながっています。ほかの日本人学校や補習校の先生、国内の外国人児童生徒を教えてらっしゃる先生も参加されました。この機会を通して悩みや課題を共有できたことが大きな強みになったんですね。先生たちのネットワークが芽生えてきて、それが力になり始めるところまでこぎつけたのが成果です。

今後の課題としては、三校の成果を他の日本人学校でもぜひ活用して



『日本語学級・在籍学級での教科横断的な日本語指導 ～マニラ日本人学校の対面・オンライン授業の実践から～』
<https://ag-5.jp/report/theme2-2/study/detail/133>



『多文化共生の学校づくり～青島日本人学校の実践～』
<https://ag-5.jp/report/theme2-2/study/detail/128>

もりたいことです。地域の特色に合わせたより魅力的な実践を期待しています。それには支援が必要で、この三年で生まれつつある教師のネットワークとか、先生たちの意欲とか、そういうものを大事にして発展していけたらいいと思っています。

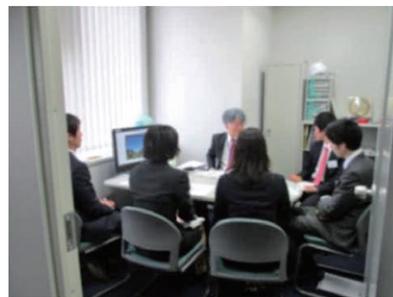
若い先生がたを育てる

日本人学校における教員(学校採用教員)の指導力向上のためのプログラム開発

植野美穂

教員が半分近くを占めている上海日本人学校で調査を行ったところ、じつは赴任前研修のニーズが高いことがわかりました。そこで一八年度には上海日本人学校の学校採用教員を対象とした二日間の赴任前研修を行いました。それ以降も、研修内容を改善しながら、海外子女教育振興財団の支援で採用されるすべての日本人学校の教員を対象に続けています。

いま行われているのはワークショップ形式ですが、「もつと時間をかけていろんなワークショップに参加したい」という声も出ています。また基本的な指導力というものを考え直していただくために、教員としての基礎、学習指導に対する基本的なこと、それから事故対応や保護者対応などの仕方をまとめたハンドブックを作成しました。各校で研修を行



学校採用教員の赴任前研修の様子(教科等指導の基本的な授業の進め方について)



『日本人学校等教員のための初任者研修ハンドブック』
<https://ag-5.jp/report/theme3/study/detail/66>

う際のマニュアルとしてご利用いただいていると思います。

世界中の補習授業校の先生が力を合わせる

補習授業校における日本語能力向上のためのプログラム開発

佐々信行



さっさ のぶゆき
佐々 信行

海外子女教育振興財団教育相談員

高度グローバル人材の育成といえ、補習校の子どもたちは自動的に複数の言語を使用する文化のなかで生活してるわけですから絶好の環境



ダラス補習授業校 ダラスで自分が見つけたものが、日本にいる親戚や友達に伝えるように文を書く。

にあるんですね。ただ、多様な子どもたちが来ているなかで充実した学習を重ねることの難しさもある。特に日本語の力が違っていている子どもたちがいっしょにいると、先生が説明してわからせるような授業では誰かにとってはおもしろくても、誰かには難しすぎる、あるいは誰かにはやさしすぎる。子どもたちの活動を中心に、それぞれの持つ力で活動に参加することで伸ばせる、そういう授業を組み立てていかなければいけないということになります。そこでこのプロジェクトではまずアメリカのダラス補習授業校の先生たちと、具体的に教科の単元を設定して、これをどういうふうに進めたいのかと、一つ一つ授業をつくっていききました。学習活動計画と呼



『楽しく日本語を伸ばす 補習授業校学習活動計画集 ~ダラス補習授業校の実践から~』
<https://ag-5.jp/report/theme4/study/detail/105>



『補習授業校児童生徒の学習状況調査等報告書』
<https://ag-5.jp/cms/ag5/common/pdf/theme4/Gakushujokyochosa.pdf>

んでいきますけど、これを皆さんに提供して見ていただいたんです。そこにだんだんと、見てもらうだけではなく、ダラスの先生がたはもちろんですけど、集まってくたさる先生がたが学習活動計画をつくることから参加してくれるようになり、授業研究会というような形で参加してもらえるようになりました。結局三十一単元分ができました。やがて人数が増えてきたので、この研究会に参加してくださるかたで「補習校ネット」という名前のグループをつくりました。現在は九十四校から二五八名の登録があります。アメリカ、ヨーロッパはもちろんアメリカやオーストラリア、中南米か

らも参加してもらっています。それで毎回、授業とその前後に研究会という流れで進めて、最後に学習活動計画を公開するというような形をとっています。それを見ていただいて参考にさせていただくのも成果ですけど、こうやって先生たちが集まって一つのテーマで研究できるようになつたということが非常に大きな成果だといえるのではないかと思います。次にもう一つ、こういう授業研究にしても何にしても、いちばん必要としているのは先生になつたばかりのかたがたなんです。補習授業校は規模が小さいところも多いので、独自で初任者研修を充実させることは難しい。そこで二〇年度から私たちが計画をして、年に五回ないし六回オンラインで研修会をやることにしました。二一年度の参加者は一九〇名、所属校は七十八校でした。三つ目は、補習授業校情報交換会というイベントです。二〇年度に、どこの学校でもコロナの対応に苦慮していた時期に「おたく、ウイルス対応はどうしてますか？」みたいなことを聞きたいということがあって、声をかけて集まっていたのがはじめてです。やがてウイルスだけでなくこういうことはどうなんだというようなりクエストに応じて

次々にやってきましたら、今年の一
月で三十六回になりました。参加者
はメーリングリストに登録している
人だけで三五七人。補習授業校の先
生たちは時間も余裕もないところで
生活しているので、同じ仕事をして
いる人たちと交流する機会がなかっ
たということで、喜んでいただいで
います。ここで知り合った人たちが
自主的に研究会を立ち上げたとい
うこともありました。そういうもの
きっかけになったことも、一つの成
果だと思っています。

日系人コミュニティと
手を結ぶ

日本文化発信の拠点形成
プログラム開発

見世千賀子

日本人学校を、現地の日系社会へ
の日本語教育、日本型教育、日本文
化の発信拠点にするという、パラグ
アイのアスンシオン日本人学校を中
心にしたプロジェクトですが、二つ
紹介します。一つは教員研修です。
二つ目が移住に関する学習について
です。

まず教員研修については、パラグ
アイには日本型教育をとり入れてい
る現地の学校が二校ほどあります。
日本の教育をしつけや教科学習の面
などで非常に高く評価して、日本語
の教育も積極的にを行っています。ま
たそれとは別に、六つの日系人移住
地と三つの主要都市に合わせて九つ
の日本語学校があり、日系の子ども
たちに日本語や日本文化を学ばせる
ために教科の学習はじめ日本的な行
事を取り入れた教育活動が行われて
います。

そういったことで、現地の学校や
日本語学校の先生を対象に、アスン
シオン日本人学校の先生が教員研修
を行っています。日本人学校の授業
を参観していただいたり、逆に日本
語学校に派遣教師の先生が出向いて
日系人の子どもたちに授業を行った
り、ということもされています。

特に第二部では中学生まで含めて全
学年の子どもたちがパラグアイの日
系人の移住の歴史について学べるよ
うな内容にしています。さらに日本
語学校の子どもたちも使えるように
ルビをふったり、わかりやすい日本
語をつけたりしています。

二つ目が、日系人の移住に関する
学習に取り組むための教材を多数開
発して、それらの学習を実施したこ
とです。子どもたちが楽しく移住に
ついて学べるような教材、それを通
して日本語の力も身につけられるよ
うなものをつくっていかうと取り組
みました。その過程でパラグアイの
移住すごろくですとか、パラグアイ
移住かるたなどを、現地の日系人の
協会のかたがたにもご協力いただい
て作成することができました。わか
りやすい日本語だけではなくてスペ
イン語もつけています。

また日本人学校の方では、社会科
の副読本である『わたしたちのパラ
グアイ』の第三版を作成しました。
新たな副読本は二部構成にしまして、

実際、これらの教材を使って、日
本人学校の子どもたちはパラグアイ
や現地の日系人社会についての理解
が深まると同時に、日本国内の外国
人移民について、また世界の移民の
人たちについても考えを広げること
ができて、非常にグローバルな視野
を持ってこの課題に取り組むことが
できるようになりました。さらに日
系人の子どもたちも、日本人として
のアイデンティティであるとか、自
分のルーツについてあらためて考え
直して、これからどう生きていくの
かを考えることにもつながったとい
う成果がありました。このプロジェ
クトを通して、日本人学校を拠点と
しつつ現地の学校や日系人の日本語
学校等との新たな関係性が構築でき
たことは非常に
よかったです
と思います。



パラグアイ移住かるた



『わたしたちのパラグアイ 第3版』
<https://ag-5.jp/report/theme5/study/detail/147>



『わたしたちのパラグアイ 第3版 活用事例集』

ただ、これを
よりよい関係性
づくりにつなげ
ます。

ていくためにどうするかが課題になってきます。今回のプロジェクトにおいては現地に優れたコーディネーターがいてくださいました。しかしプロジェクトが終わったあとに継続させていくためには、日本語学校側も受身的にならず、また日本人学校側も現地社会に貢献することを自分たちの課題として捉えて、お互いが主体的にかかわっていくこうとする関係性づくりとシステムづくりが必要ではないかと考えています。

カリフォルニアで「日本のファン」をつくる

—— 学校図書館を活用した文化交流 ——

中村雅治

アメリカのカリフォルニア州は日系人も多く、日本語を教えている国公立の学校が二〇〇近くあるんですね。そういう人々と学校図書を紹介して文化交流するような支援活動を目指してスタートしました。

西大和学園カリフォルニア校は校舎とは別棟で図書館を持っているので安全対策が取りやすいメリットが

あります。しかしアメリカなので、はじめは安全対策の観点から、交流校の生徒あるいは教師、保護者を対象に、西大和の生徒さんが、たとえば茶道の歴史や作法について学習して、それを英語で発表する。そうした活動にそれを書いてある図書をセットにして紹介することを行いました。これが非常に効果が高いというので、けん玉だとかお花だとか、いろんな日本文化を紹介する活動を行っています。現地校から注文を取って図書を貸し出し、貸し出した図書の活用成果をフィードバックしてもらおうという流れが出てきています。二〇二〇年のオリンピック・パラリンピック前には、オリンピック・パラリンピックの歴史コーナーを設けたりもしました。



けん玉貸し出しセット

コロナ禍になってから対外活動は止まっておりますが、西大和学園の

地域的にも離れている補習授業校数校とデジタル図書を活用した取り組みを行っていただいております。デジタル図書はオンラインでサービスが受けられることに加え、音声で読み聞かせる機能や検索機能もあり、学習者の個々のニーズに合わせた使い方ができるのではないかと、引き続き研究を続けてもらっています。

さらに西海岸にはカリフォルニア州を含め大きな日系人コミュニティもあり、公立図書館にも数多くの日本の図書、新聞や月刊誌、漫画も含めてそろっているようなところがあります。そういう図書館とうまく連携していきたいと考えています。

文化交流を通じ、日本のファンをつくる活動の一つとして学校図書館の活用もあるのかなと思っています。

子どもたちが心待ちにする遠隔合同授業

—— ICTを活用した遠隔での教育の質向上のためのプログラム開発 ——

後藤彰夫

二〇一九年度から、メキシコのア



ことうあきお
後藤 彰夫
海外子女教育振興財団教育相談員

グアスカリエンテス日本人学校とコスタリカのサン・ホセ日本人学校のペア、そしていずれもブラジルにあるリオ・デ・ジャネイロとサンパウロ日本人学校のペア、つまり二グループ四校で、学校間で子どもたちを結び、合同遠隔授業や合同遠隔教員研修を行ってきました。

成果は大きく分けて三つあります。一つ目は、遠隔授業の形態を「一斉型・発表型・発問型・対話型」に分類して整理するなかでそれぞれの特



アグスカリエンテス日本人学校との合同遠隔授業 (サン・ホセ日本人学校)



サンパウロ日本人学校の児童のクイズに答えるリオ・デ・ジャネイロ日本人学校の児童

徴を明らかにして、授業の流れや工夫、教師の役割、必要な機材やツールをまとめることができたことです。二つ目は、合同遠隔授業で直面した課題に対して、問題点と解決のための行動。その結果を二十八種類の「知恵の蔵（遠隔授業におけるパターンランゲージ）」としてまとめることができたことです。三つ目は、合同遠隔授業の実践のなかでオンラインでの子ども顔出し（肖像権）の問題をどのようにしていくのかなど新しい挑戦が生まれてきたことです。

合同遠隔授業を重ねれば重ねるほど、他校の子どもたちといっしょに授業を受けられることを期待し、積極的に相手のことを尊重し、理解していこうという子どもたちの姿が見られました。

一方、教師の側では、子どもの集

中力を継続させる工夫、画面に映らない子どもを把握する方法、不安定なネット環境への対応、授業準備の時間の確保、オンラインに適さないと考えられる授業の準備や対応、そして授業以外で学校が担うべき人間関係づくりや集団行動の指導などをいかに補完していくかなど、さまざまな課題が見えてきました。各校の先生がそれぞれひとりぼっちで目の前の子どもたちを指導・支援するのはなく、学校を越えて先生がたを結び、子どもたちを結ぶ教育を提供できると考えています。

研究の二年目には突然のコロナ禍により学校が閉鎖されました。しかし「子どもたちの学びを止めない」ために、四校ともいち早くオンラインの授業を立ち上げました。これは、「遠隔教育」に取り組んでいた自信と研究成果によるものです。

この成果をそれぞれの地域の現地校等へフィードバックしていただき、時間軸を越えた結びつきと継続的な実践を期待しています。また二グループ四校での実践から、他校を巻き込んだ面的な広がり生まれてきています。この継続と拡張から、合同遠隔授業がさらに深まることを期待しています。

国内と海外を結んだ
特別支援

特別支援教育に関する
遠隔指導

新原和正

日本国内でも通常学級に在籍している児童生徒のなかに特別な配慮を要するお子さんが約六・五パーセントいるといわれますが、二〇一八年度に文部科学省と国立特別支援教育総合研究所が日本人学校に対する調査を行った結果、日本人学校でも約四パーセントのお子さんが在籍しているという状況が明らかになりました。そこで私たちも日本人学校の実態として、特別支援学校や支援学級などでの指導経験がある教員がどれくらいいるのかということ調べたところ、「まったくいない」もしくは



かずまさ
しんはら
新原 和正
海外子女教育振興財団
総務チームリーダー

「二人」という学校が半数以上でした。特別支援の免許を持っている先生となると「ゼロ」もしくは「一人」というところが七割に近い。さらに特別支援教育に関する専門機関とか相談機関等が現地には少ない。言語の問題もありますが、連携が可能な医療機関というものも少ない。そこで遠隔システムを活用し、日本国内の特別支援学校と協働してコンサルテーションの実施と効果の測定を行うプロジェクトを実施しました。

だいたい月一回から二回ですが、対象となるお子さんの状況や課題について日本人学校から情報をいただきました。お子さんの状況を把握したうえで支援学校からのアドバイスを行ってきています。

成果としては、日本人学校が支援学校と協働して取り組むことで校内の支援体制の強化にも役立ったと感じています。そして、日本人学



遠隔によるコンサルテーションの実施

校では三年で先生がたが入れかわる

ということ、引き継ぎが本当に重

要だと認識していたりだとか、学

校内に特別支援教育に対する文化を

持つ、最初から難しいとかできない

とかいうスタンスではなくて、「日

本国内と同じようにやるのがあたり

まえ」という意識づけが大事だとい

う認識を持っていただいたりしたこ

とがよかったと感じています。今回

はハノイと北京の日本人学校にご協

力いただきましたが、全職員の校内

研修の一環と位置づけていただいで、

チーム力の向上にもつながったとか、

先生たちの間で子どものポジティブ

なところを共有できる雰囲気醸成

につながったとも聞いています。

一方、国内側の支援体制のさらなる

強化、また日本人学校のさらなる

体制強化、特別支援教育に携わる人

員の配置等が課題だと感じています。

そして、やはり時差への対応や不安

定な通信環境の改善も考えていかな

くてはならないと思っています。



これからのために

佐藤 すべてのプロジェクトの報告

をしていただきましたので、次は全

体的なことをご感想があるかたはひ

とことずつ。

植野 私は教員研修の必要性を痛感

しました。長いスパンで教師が学ぶ

時間を十分に確保し、システムとし

て教師が学べる環境をつくることが

大事であると。そのためのお手伝い

が求められていると考えます。国内

にいると学会や私的な研究会などに

参加する機会もつくれるのですが、

海外にいるとなかなか難しい。オン

ラインもICTも活用して、それぞ

れの先生が関心ある研修に参加でき

るような仕組みを考えていってもい

いのではないかと思いました。

見世 いちばんは多文化化とグロー

バル化が進むなかで、海外の日本人

学校だけではなく、日本国内の学校

教育自体も変わっていかないといい

けないと、あらためて感じました。

「日本の子ども」といったときにそ

れはどういう子どもなのかと、国内

においても考えてグローバルな市民

を育てることを目指した教育を考え

ていくことが必要なのではないかな

と。

もう一つは、子どもたちはほんと

うに移動しながら生きているんだな

ということ。日本人学校にいる

子どもたちは移動しながら学んでい

るわけですが、国内においても外国

の子どもたちが増えていますし、ま

たそういった子どもたちといっしょ

に学ぶ、まだ日本しか経験していな

い子どもたちも当事者であると考え

られます。だから移民学習というの

はこれから重要な非常にいいテーマ

なのではないかとあらためて思った

ところです。国内の教育を変えてい

くためには、帰国された先生がたの、

国内でのグローバルな活動をもっと

自由に、活発にできるようにサポート

していくことも必要だと思いました。

近田 日本語支援について、当初、

国内の外国人児童生徒教育のノウハ

ウを使ったのですが、国内を追い越

すというか、よい取り組みができた

した。だから逆輸入というか、日本

人学校が日本の学校のロールモデル

になっていくのもいいんじゃないか

と思います。

佐々 補習授業校の先生ってそもそ

もが国際人材なわけで、意欲もあれ

ばいろんな力や知恵を持っている人

がいるので、どんどんさまざまなこ

とが発展していくというようなこと

があります。ですから私たちはこれ

からそういう場をつくること、そし

て多くのかたにこういう場があると

知らせっていくことをやっていけば、

もっともつといういろなことが進ん

でいくのではないかなと思います。

オンラインでつながるといのは、

やってみたら意外と簡単にできるの

で、これをこの先も続けていけたら

と思います。

新原 昨年の十一月十三日に事業報

告会を実施しました。世界各国から

約一二〇名のかたにご参加いただき

ました。質疑応答では、保護者に対

するかかり方とか、日本人学校同

士のかかり方といったことも含め

て、かなり活発な意見交換がなされ

ました。将来的には日本人学校同士

が連携して支援をする仕組みや、在

外だけで課題解決ができるような体

制というものが理想なのかなと感じ

ています。

佐藤 では、このプロジェクトをい

つしよに進めてきた岡村先生、渋谷

先生からも願います。

岡村 補習校チームで、おもに学習

活動計画や初任者研修、補習校調査・

分析を担当しました。ダラス補習授

業校をはじめ世界中の熱意あふれる

先生がたとつながることができ、楽

しく充実した五年間でした。自分自

身が補習校で教えていたときにもこ

んなサポートがあったなら、と思え

るような研修を皆さんと力を合わせ

て形にできたことをとてもうれしく

思います。

渋谷 私も補習校チームに参画し、

公開授業を拝見するなかで、海外に



なかむら いくこ
岡村 郁子
東京都立大学教授



しぶや まきき
渋谷 真樹
日本赤十字看護大学教授



みつい ともゆき
三井 知之
海外子女教育振興財団
教育相談員



なかむら まさこ
中村 昌子
海外子女教育振興財団
教育相談員

育ちながら日本の文化を学び、日本語で自分たちの経験や考えを交わし合っている子どもや若者の姿に頼もしさを感じました。彼ら彼女たちが仲間を増やし、飛躍するための力をつけていける在外教育施設でありた

いですね。

佐藤 では、AG5に途中からご参加いただいた三井先生、中村先生からもひとことずつ。

三井 AG5のおかげで補習校の先生がたの横のつながりが生まれまして。研究協議会でも一つの授業に対して世界中の先生が意見を言い合える輪ができて、これはすごいなと思っています。ですからぜひ継続してさらに広げていきたいいいのではないかなと思います。

中村(昌) テーマ①の探究学習に限った感想ですが、日本人学校ならではのグローバルな問題、あるいはジェンダーであるとか、差別であるとか、日本にいたらなかなか気づけないようなこと、あまり興味関心を持っていないようなことに子どもたちが目をやって、将来グローバルな社会で生きていくときの大きな糧になつていくのではないかなと思います。それをまた日本に持つて帰ってきてもらうようなシステムができるといいのかなと強く感じました。

佐藤 はい。では最後に私から簡単に成果と課題をまとめたいと思います。一つ目の大きな成果は日本人学校や補習授業校の今後の教育のあり方について、具体的な実践に裏打ちされた新しい方向性を示すことができ

たのではないかとということ。二つ目

は、学校とか国、地域の壁を越えた実践の広がりが可能になったことで、これは新型コロナウイルスの影響もあるのですが、壁を取っ払うような新しい方向性が見えてきている。三つ目は、在外教育施設の大きな課題である教員の研修つまり教員の力量をどうつけるかということについて、具体的な実践を通して示すことができただけではないかなと思っています。そして四つ目、財団と私たちも含めて日本人学校・補習授業校の先生が

いっしょにやれたというのがすごくいいことでした。いろんな学校や補習校が協働して課題を見つけ、解決するためにいっしょに考えて、それを具体的にどう実践するか、実践してみてもそこからまた課題を見つけて、また新たに考えて、また実践を試みていくというサイクルができました。これも大きな成果だと思いました。

一方課題としては「継続」。継続するために財政の裏づけをどうするか。継続性を担保する制度的な仕組みがどうしても必要。そして人の継続性も大切です。この学校でこういうテーマで、こういうプロジェクトをやりますけど、そこに行きたい人はいませんかって手を挙げていただくような仕かけが必要なんじゃな

いでしょか。

では中村相談役、財団としての決意表明で締めてください。

中村(雅) AG5の活動をさらに発展・展開・定着させるため、我々財団ができることは、しっかりとやりたいと考えています。財政的支援、派遣教員の充実等、国と協働していかなければ解決できない課題もありますが、しっかりと連携して取り組んでまいりたいと思います。

いまのところ「国内と同等の学校環境を整える」ことも目指して進んでいますが、これを法的に位置づけることが支援充実のためには大切です。特に教育の質を高めるためには、派遣される先生がたにグローバル人材育成を自分の使命と受け止めてもらうような派遣制度にしていく必要があるのではないでしょか。そして帰任したら在外での経験が国内でも生かされるような好循環の派遣制度にしたいかないと、これからの継続性維持の課題も解決できないのではないかなと思っています。

今後とも子どもたちと先生がたのグローバル化のために、夢と志を持ち、引き続き関係各位のご指導とご協力をお願いしたいというのが私の切なる要望でございます。よろしくお願いたします。